

学校づくりの一員として

one of them

日々の雑記帳 No.22 2003. 11. 10 by yoshiki

子どもの中の闇

前号で、「子どもたちがずいぶん良くなった。」と書きましたが、先週は、一転して残念な子ども姿が出てしまいました。

掲示してある同じ子の顔写真を連続して破る、ということが起きました。

どうしてそんな卑劣なことをするんだろうという腹立たしさの一方で、こんな形でうさばらしをするしかない子の心の中にいったい何があるんだろう、それが知りたいと思います。

1つの思い出

この事件のことを考えているとき、ふと、昔のあるできごとを思い出しました。

もう、十五年ぐらい前のことで勤務していた小学校で、夜のうちに前庭を荒らしたずらが頻発したことがありました。朝、学校に来ると、花の鉢がひっくり返されていたり、百葉箱が傾けられていたりするので、誰がこんな卑劣なことをするのか、犯人を突き止めようとい

うことになり、夜遅くまで学校に待機して待ちました。

そして、何日目の夜、ついに前庭に侵入してきた二人の子を見つけ、取り押さえました。

捕まえたのは、中学生でした。皮肉なことに、私が五、六年の二年間担任した子たちでした。

小学校時代、その子たちは決してワルではありませんでした。むしろおとなしく、何でもまじめに取り組む子たちでした。ですから、どうしても、この子たちとあの卑劣なはずらとが自分の中では結びつきませんでした。

後日、中学校の先生から、事情聴取した内容を聞かせてもらい、やつと飲み込めました。

「ぼくらは、ほっとかれています。」

これが、その子たちの言い分でした。

「勉強がよく出来る子、運動などで活躍する子は、当然先生から目をかけてもらっている。逆に、突出してはみ出しているワルの子も、生徒指導という形で先

生にかまってもらっている。

それに比べて何も目立った特長はなく、おとなしくしている者には、先生は、全然知らん顔している。

僕らかてもつと声かけてほしいのに。」

特に期待されることもなく、教師から目をかけてもらうこともない不満、鬱屈した気持ちのはけ口として、夜の前庭荒らしをしていたのでした。

その話を聞いて、

自分を認めてほしい、自分の存在価値を実感させてほしいという願いは、一人ひとり、どの子の中にもあるのだということ、目立たない子ほど、却って一層強烈な自己主張を秘めているのだということをお知らせしました。

今回の写真へいたずらした子も、そうせざるを得ない鬱屈した気持ちがあるのだろうと思います。

犯人さがしなんて、いやなことですが、その子の思いをきちんと受け止めてやるために、はつきりさせたいと思います。

やっぱり『授業』しかない

子どもの姿が変だ、仲間関係がぎくしゃくしている、ということが学級に起きてきたとき、どうするか。

自分が学級担任だったときも、時々そんな状況に陥ることがありました。

子どもどうしのトラブルにきちんと対応することはもちろん大切だけれど、人間関係というのは話し合えばすぐ解決するというものでもありません。

子どもたちの中にある鬱屈した気分を少しでも晴れやかにするために、自分の場合、とにかく、子どもが学校に来ている時間の大半を占める『授業』を何とかどの子どもが楽しい、分かる、といってくれるような時間にすることに一生懸命になろう、と考えてきました。うまく行かなくても教師の必死な姿は子どもに必ず伝わると思っています。